

聖書の中で主イエスの誕生の場面を記しているのはマタイとルカであります。ルカは比較的詳しく記しており、人口調査があって登録のためにヨセフとマリヤがベツレヘムに向かっていたことや宿屋には彼らのいる余地がなかったこと、誕生を真っ先に知らされたのが羊飼いたちであったことを伝えております。この人口調査は当時イスラエルを属州化しておりましたローマ帝国の手によって行われました。目的は紛れもなく税金を課税するためでした。戸籍が整備されていなかった当時のこと、その方法は自分の出身地へ行って行わねばならなかったのです。人々は全員仕事や生活に優先して旅に出て、必要な手続きを行わねばならなかったのです。抑圧に苦しむ人々の姿がよく描かれている場面です。

羊飼いは、当時の社会の中で最も身分の低いものとされていました。彼らは人々から低いものと嫌われ、家もなく野宿しながら羊の群れの番をしていたのです。世の救い主と言われる主イエス・キリストの誕生を知るには最もふさわしくないように思える人々でした。しかし主なる神はその誕生を誰よりも先に知らされたのです。それは、彼らが一番、失望と悲しみの中にいたからであり、人生の中で喜びと希望など二度と訪れることはないと思っていたからです。自分が何故この世にいるのか分からなくなってしまうような人々に、主イエスキリストは本当の友となり、生きる喜びを与え、慰めるためにこの世に来られた、これは事実なのだと言聖書は語っております。

私たちが先ほど礼拝で用いました大栄光の歌は、このとき羊飼いや現れた天使達が主なる神を讃美して歌ったものです。私たちは日曜日の聖餐式の度に、主の誕生が知らされた時の天使の喜びの歌をそのまま用いて礼拝をしているのです。すなわちその喜びがその当時だけのものではない、ただ昔の出来事というだけでもない、今日の私たちにとっても大きな喜びであることをはっきりと示しております。

本日の旧約聖書は、いわゆる第二イザヤの言葉が選ばれておりました。イスラエル王国が南北に分裂をして、北王国がアッシリア帝国によって滅ぼされ、南王国も末期を迎えました。イスラエルは国中に悪がはびこり、その結果、主なる神は悔い改めを促すために国を他国の手に渡して滅亡させてしまいました。人々は捕えられて滅ぼした国へと連れていかれてしまいます。民は国という大きなよりどころを失い、他国の苦しみにあって初めて、自分達の上には主なる神がいつもおられ、関わっておられたこと、自分達が主なる神に対して大きな罪人であったことを悟ったのでした。そのような人達に対し、主なる神は人々に来たるべき希望を示されたのでした。そして民は、ペルシャの王キュロスから、条件付きとは言え、国の復興を許されることになったのです。第三イザヤは、捕囚から帰国した国の再建を指導する内容になっており、本日の旧約聖書の箇所は、その喜びを語っております。

しかしその後人間はどうなっていったのでしょうか。旧約聖書と旧約聖書続編は悲しい歴史を語っているのです。ユダヤの属州支配はその後、マケドニア、プトレマイオス、セレウコスと続き、セレウコス朝がユダヤ教禁止令を出したことへの反発が起き、ユダヤの国は、マカベア戦争のもとに400年ぶりに独立を手にすることが出来ました。この時に誕生した王朝とハスモン王朝と呼んでいます。しかしこの王朝も長くは続かず、王位争いによる兄弟げんかがきっかけで、紀元前63年、ローマ帝国によって再び属州化されてしまいます。主なる神がイスラエルに対して関わりをずっと続けておられたのに、人間が無視して悪へと歩み、主なる神はそれに対し悔い

改めを促し続けておられた、しかし人間の罪は深く、正しく歩むことは不可能であった。人間には正しく生きる指針が与えられねばならない、その登場を切に待ち望む。聖書はこのように語っております。人間が持っている自己中心の罪は深く根ざしており、もはや人間の力だけでは、一時の悔い改めでは効果は望めなかったのです。

さらに、悲劇の歴史はそれにとどまりません。ハスモン王朝時代、南部イドマヤ方面の将軍であったアンティパル1世の孫、後のヘロデ大王は、ローマの徴税官に任命された際、言うことを聞かない町は町ごと焼き払い、人々を奴隷として売り飛ばしていました。そして賄賂を使ってハスモン家を滅亡させ、自分自身がユダヤの王になったのでした。ヘロデの残虐さは、人間の持つ自己中心性を現しているのです。そして主イエスが生まれた時代と現代に、果してどれ程の違いがあるのかが改めて問われています。

主イエスはこのような私たちのところへ来られました。本日の福音書は、主イエスがどのような存在としてこの世界に来られたのかを語っています。旧約時代、主なる神は言葉によってこの世界で働かれました。天地を造られた時も、ノアの洪水の時も、アブラハムに1500kmの旅をさせてイスラエルの父祖とした時も、モーセを指導者として40年かけ、出エジプトの旅をしてカナンの地へ定住した時も、サムエルの時代に部族連合社会から王国時代へと大転換を遂げた時も、そして、多くの預言者が活躍した時も、主なる神はすべて言葉でこの世界に関わられました。

主イエスの誕生は、主なる神が言葉だけでなく、肉体をもってこの世界に来られたことを意味します。言葉という、手で触れることが出来ず、目で見ることが出来ない、そういう主なる神の存在から、私たちが触れることが出来る、目で見ることが出来る形で、主なる神がこの世に来られたことを示しているのです。そして、失望や悲しみ、苦しみを主なる神は必ず顧みてくださり、二度と消えることのない喜びと希望で満たしてくださると伝えていきます。

主イエスは復活後、40日目に天に帰られました。その10日後、すなわち復活から50日目に聖霊が降り、主なる神による救いの歴史はまた新しい時代を迎えました。言葉の時代から、目に見え、触れられる時代へ、そして、目に見えなくても、聖霊により、主なる神は常に私たちと共におられ、わたしたちが実感することが出来る時代になったのです。どこにいても、何をしていても、主なる神はいつも私たちと共におられることを、聖霊が指し示しているのです。

主イエスは、人間には出来ない力を世に示し、神の国を指し示し、命へ至る、すなわち正しい生き方を人間に示すためにこの世に来られたのでした。私たちはこのクリスマスに、主イエスの誕生を2022年前の出来事の記念をとして祝うのではなく、当日のユダヤ社会を振り返る時、現代が驚くほど当時と似通っていることに気づき、今年もまた、私たちはメシア・キリストによって救われねばならない世界に生き続けていることを覚えて、主イエスの光が一人一人の心に明るく灯り、世界平和へと歩んでいくことが出来るよう、祈り求めなければなりません。

わたしたちは主によらなければ命の道へ至ることが出来ません。自分の罪の姿を考えますとき、それは明らかであります。わたしたちはそのことをよく覚えて、主のご降誕の喜びを新たにしたいものであります。